

カラー・ラインへの挑戦 チャールズ・W・チェスナットの*The Wife of His Youth*の編み方

中 村 久 男

序

19世紀末から20世紀初頭にかけてわずか10数年の創作活動ののち筆を折ったアフリカ系アメリカ人作家チャールズ・W・チェスナット (Charles W. Chesnutt) は、二つの短編集を残している。一つは*The Conjure Woman*、もう一つが*The Wife of His Youth*である。前者は南部農園にやってきた北部の白人夫婦を、元黒人奴隷の爺さんアンクル・ジュリアス (Uncle Julius) が呪術を巡る話を利用して自分に都合のよいようにうまく丸め込む様を描いた物語集である。この短編集が好評をもって迎えられ、それに気を良くしたヒュートン・ミフリン社 (Houghton, Mifflin & Co.) はクリスマスの贈り物用にもう一つの短編集を企画したのであった (Fienberg, 207)。それが*The Wife of His Youth*である。

この第二短編集にはウォルター・ハインズ・ページ (Walter Hines Page) の提案を受け入れ*And Other Stories of The Color Line*というサブタイトルが付けられている。彼は当時の『アトランティック・マンスリー』 (*The Atlantic Monthly*) をはじめ名だたる文芸誌を手掛けた有力な編集者で、アフリカ系アメリカ人に理解があり、チェスナットをミフリン社に推薦したのがページであった。チェスナットは出版社に1899年8月23日付けでサブタイトルを含めこれ以上良いタイトルを思いつかないと書き送っている。

So unless there is some good reason to the contrary, I [Chesnutt] rather think that name would very aptly characterize the volume; and I would like to hope

that the stories, while written primarily as attempts at literary art, might by depicting life as it is in certain aspects that no one has ever before attempted to adequately describe, throw a little light upon the great problem on which the stories are strung; for the backbone of this volume is not character, like Uncle Julius in *The Conjure Woman*, but a subject, as indicated in the title—the Color Line. (*To be*, 127)

カラー・ラインとは有色人種、特に白人との混血を含めたアフリカ系アメリカ人 = 黒人に対する差別や障壁を表す言葉である¹。 *And Other Stories of The Color Line* というサブタイトルを付加することによって、この短編集がカラー・ラインという人種間の前線を巡る攻防の物語集であるとの意図が前面に押し出されることとなる。

この短編集が出版されたのは19世紀末である。南部では黒人の政治参加を食い止めるために、1870年に定められた黒人に対する選挙権を最小限に留めようとする画策が進められ、北部統治による南部再建時代が77年に終わるとともに、黒人への差別が強化されて行く。たとえば、鉄道においては白人車両と黒人車両をはっきりと分けるようになり、この例にみられるような人種隔離制度（通称ジムクロウ制）が南部諸州に広がる。その動きは、96年の「分離すれども平等」という有名な判決が出されたブレッシー・ファーガソン判決によって合衆国憲法によって保障され、黒人に対する差別は助長されて行くこととなる。このような時代背景を考慮に入れれば、このサブタイトルは思い切った命名であると言えよう。クリスマス・シーズンの贈答用の短編集を編むと目論んでいた出版社にとってもこのようなタイトル採用は冒険と言ってもよいほどの英断であったであろう。

20世紀という新しい時代を迎えようとするまさにその時に、アメリカ南部では歴史に逆行するような動きを見せていた。その動向を見つめつつ、作家がこの挑戦的なタイトルをもつ短編集をどのように編んで行ったかを考察する。いまだ知られざる作品であり、またストーリーの展開そのものが作者の主張と密に絡んでいるので、冗長ながら各短編のストーリー紹介を行う。

(一)

第一短編集*The Conjure Woman*を編む際の出版社とのやり取りで、チェスナットは、最初に置く短編には“The Gophered Grapevine”を、二番目には“Po’ Sandy”を、それ以外の短編の並べ方は「重要ではない」と述べている (*To be*, 113)。それに対し、*The Wife of His Youth*を編むにあたっては「最も効果的に並べたい」(*To be*, 127)と出版社に書き送っている。彼が「最も効果的」と考えたのが以下の配列である。

1. “The Wife of His Youth”
2. “Her Virginia Mammy”
3. “The Sheriff’s Children”
4. “A Matter of Principle”
5. “Cicely’s Dream”
6. “The Passing of Grandison”
7. “Uncle Wellington’s Wives”
8. “The Bouquet”
9. “The Web of Circumstance”

この配列にはどのような意図が込められているのであろうか。まず1887年の2月に行われたページとのやり取りが間接的なヒントを与えてくれるであろう。チェスナットはページから“The Wife of His Youth”と“The March of Progress”の『アトランティック・マンスリー』への採用通知を受け取る。ページは“The Wife”と“The March”を掲載するにあたり、共通の見出しを付けて出版してはどうかという提案を行った。それに応えて、チェスナットは“The Wife”と“The March”にもう一編“A Matter of Principle”を加えて“Forward, Back, and Cross Over”という見出しで出版してはどうか、しかも、“The March”、“The Wife”、“A Matter”の順で、“Forward, Back, and Cross Over”に対応していると返事している。また、別案として、“The Wife”、“A Matter”の2作を“The Blue Veins”のタイトルで、あるいは、“A Matter”が不採用なら、“The March”と“The Wife”を“Forward and Back”ないしは“The Warp and the Woof (縦糸と横糸)”という共通見出しを付して掲載してはどうかと述べている (*To be*, 97)。結局、チェスナットの提案は実現しなかった。というのは、“A Matter”は『アトランティック・マンスリー』には採用されず、また、“The March”は第二短編集には収録されなかったからである。しかし、このチェスナットの提案からは、“The Wife”は“Back”にあたる物語、“A Matter”は“Cross Over”にあたる物語であることがわかり、そして、第二短編集の最初

の“The Wife”と4番目の“A Matter”の2作は“The Blue Veins”ものであることも分かる。

ブルー・ヴェインズとは“The Wife of His Youth”の冒頭で紹介されるように、もともとは「正しい社会的規範の確立と維持」を目的として、「南北戦争直後に北部の一都市で組織された有色人種の小さな社交界」で、「自然の親近感で結ばれた、概して [肌の色が] 黒いというよりも白い人々によって構成された」(1)が、その後、その社交界は「ブルー・ヴェインズ協会」として知られるようになり、その会員が「ブルー・ヴェインズ」と呼ばれるようになる。ブルー・ヴェインズは黒人と白人との混血であっても肌の色が薄く、教養も身に着けた中産階級の人びとを指している。チェスナット自身、今に残る写真からして、本人が黒人の血が流れていることを申し出なければ、アフリカ系であるとはわからない容貌であり、また教師を振り出しに法廷速記人を経て法律事務所を営む中産階級に属していた。しかも、チェスナットの父も母も南北戦争以前から自由黒人、すなわち奴隷ではなかった。確かに彼は「いままで誰も描こうとはしなかった」黒人種のさまざまな局面をあるがまま描くことによって「大きな問題に小さな光を投げかける」ことのできる特殊な環境に身を置いていたのである。黒人の中産階級を描いた作品は当時の読者層のほぼ全部を占めていた白人種からみれば非常に興味深いものであったであろうことは想像に難くない (*To be*, 22)。

では、“The Wife”がなぜ“Back”で、“A Matter”がなぜ“Cross Over”なのであろうか。前者は、夫が川下に売られると知った妻が彼を逃がし、そのまま生き別れになった元奴隷の夫婦が25年を経て南北戦争後によりやく再会する物語である。今は社交界の重鎮であり、ブルー・ヴェインズの多くの女性の憧れの的となっているライダー氏 (Mr. Ryder) が、彼との婚約も間近とされていたウイトに富み洗練された女性ミセス・ディクソン (Mrs. Dixon) への思いを振り切り、突然現れた洗練とはほど遠い今なお黒人然とした彼の若かりし日の妻を迎え入れるという話である。名前を変えて立派な紳士へと変貌を遂げた彼を自分の夫であるとの認識をもたない妻を拒絶しようと思えばできたであろう。自分の過去を否定して現在を肯定することも可能であったらう。しかし、ライダーはしばし逡巡するも、四半世紀にわたり夫の生

存を信じてひたすら夫を探し続けた妻を拒絶することはできない。

この短編が示唆するのは単純に言ってしまえば過去の否定ではなく、過去
 の受容である。しかし、作者の思いはもう少し複雑である。ライダーの持論
 を見てみよう。

I have no race prejudice . . . but we people of mixed blood are ground
 between the upper and the nether millstone. Our fate lies between absorption
 by the white race and extinction in the black. The one does n't [sic] want us
 yet, but may take us in time. The other would welcome us, but it would be
 for us a backward step. 'With malice towards none, with charity for all,' we
 must do the best we can for ourselves and those who are to follow us. Self-
 preservation is the first law of nature. (7)

作者自身は白人としても通る容姿でありながら、黒人としてのアイデンティ
 ティを選択し、黒人作家として敢えてカミングアウトしたのとは対照的に、
 黒人という選択肢は「後退の一步となる」という言葉から分かるようにライ
 ダーには白人に擦り寄ろうとする態度が明白である。しかし、これはブル
 ー・ヴェインズという社交界にどっぷりと浸かり、過去を忘れ未来への目
 を向けようとしていたライダーの言葉であり、25年ぶりの妻との再会を契機
 に彼は忘れかけていた過去を思い起こし、白人に近い肌の色をしていようと
 黒人の血を否定し得ないという認識へと至るのである。ただ単に時間を
 “back”するのではなく、現在の自分を作り上げた血脈へと“back”し、その上
 で、過去を受け入れ未来へと目を向けようとするのである。

“Cross Over”と作者が看做した“A Matter of Principle”は未来に目を向け過
 ぎ、白人種に吸収されることをのみを願うブルー・ヴェインズのひとり、ク
 レイトン氏 (Mr. Clayton) の勘違いが引き起こす物語である。彼の娘アリス
 (Alice) は美人で白人に近い肌色である。南部を大票田として当選した大統
 領の就任式に赴いたアリスは舞踏会で相手をしたブラウン氏 (Mr. Brown)
 からもう一度会いたいという手紙を受け取る。しかし、彼女は多くの殿方と
 踊ったので、誰がブラウン氏なのかがわからない。クレイトンは代議士であ

るブラウンは結婚相手として不足はないが、気掛かりなのは彼の肌の色。もし、彼が「黒い」のなら話しは進めず、もし「相応しい色合い」(108)なら、彼を招待しようと考え、ワシントンの事情に詳しいサドラー氏 (Mr. Sadler) に問い合わせてみると、ブラウンは二人いて、ハミルトンの方は極めて明るい肌色、すなわち白人の肌色に近く、美男。ヘンリーの方はダーク、すなわち黒人に近い肌色とのこと。かくしてクレイトンはハミルトンを招待することにする。しかし、駅で待ち受けたクレイトンが目にしたのは紛れもなく黒人そのものの肌色をした男性であった。彼はとっさに娘はジフテリアにかかったので家に近づかないようにと嘘をつき、彼を遠ざけてしまう。ところが、新聞を見てみるとブラウン氏には純粋の黒人であるジョーンズ氏 (Jones) が同行しており、ブラウン氏は明るい肌色をしていることに気付くが、それは後の祭り。ブラウン氏は別のブルー・ヴェインズ宅で厚くもてなされ、そこの娘と婚約してしまう。クレイトンは、人種問題の解決に必要なのは兄弟愛と口癖にしているにもかかわらず、最初の短編のライダーと同じように白人種に吸収されることを望み、下の石臼である純粋の黒人によって磨り潰され同化されるのは退行と考える人物である。クレイトンにとってクロス・オーヴァーするとは黒人としてのアイデンティティを捨て、白人種に近づき同化吸収されることなのである。作者はこのような偽善的なブルー・ヴェインズを痛烈な皮肉を込めて描いているのである。

“The Wife”と“A Matter”との間に、この短編集では“Her Virginia Mammy”と“The Sheriff’s Children”が挟み込まれている。“Her Virginia Mammy”は、白人としてのアイデンティティを与えられた混血の女性がそれを信じて旧家の白人男性の求婚を受け入れるという話である。クララ (Clara Hohlfelder) はジョン (John) から求婚されているが、自分の出自に疑問をもっており、返事を引き延ばしている。彼女は赤ん坊の時、蒸気船の火災事故から救出され、身元不詳のまま、寛大なドイツからの政治亡命者夫妻に引き取られ育てられた。彼女はダンス教師をしており、黒人に対しても偏見をもたず黒人用のダンスクラスで教えている。しかし、彼女の悩みは自分の素性が知れないこと。ところが、そのダンス教室に付き添いでやってくるオリーブ色の肌色をしたミセス・ハーパー (Mrs. Harper) がクララのネックレスとそれに彫られたイ

ニシャルを見てクララの父と母を知っていると言う。彼女の話によると、クララの父も母もヴァージニアの旧家中の旧家の出である。ヨーロッパで学んだクララの父は奴隷制度は正しくないと感じており、遺産相続後に奴隷を解放し、土地を売ってフランスで暮らすため、蒸気船で出港地のニューオリンズに向かっていた時に事故に遭って亡くなったのであった。ミセス・ハーパーはその夫妻の赤子の乳母としてヨーロッパ行きに同行してその事故に遭い、数マイル流され助けられるも、救助してくれた男によってニューオリンズで奴隷として売られてしまったという。クララはジョンに自らの出自を誇らしげに語り、彼の求婚を受け入れる。ジョンは、クララとミセス・ハーパーが鏡像のように似ており、事故当時新聞に赤ん坊救出が報じられ身元引受人を探したにもかかわらず誰一人名乗り出なかったことなどから、二人が親子である可能性が高く、それゆえクララには黒人の血が流れていることに気付いている。しかし、ジョンはそれを承知しながらもクララと結婚する(55)。

“The Wife”では過去があるがままに受け入れられるのに対し、この短編では偽造された過去が受け入れられる。ライダーは元奴隷サイモンとしての過去を隠蔽し名前を変えて自ら築き上げたブルー・ヴェインズの一員としての現在のアイデンティティを揺るがしかねない過去を引き受ける決意をするのに対し、「どこの誰かも分からぬ嬢 (“a Miss Nobody, from Nowhere”)」(32)であるのを恐れ、過去を探し求めていたクララは黒人の血を引く実の母の嘘によって名門の白人令嬢としてのアイデンティティが付与されなんの疑いももたずそれを受け入れるのである。また、“The Wife”では偽善的と思われたライダーが真実の愛にうたれその偽善性を超越したのに対し、黒人に対して偏見をもたぬというクララが、「私は良い血統、古い南部貴族の家系」(55)と誇らしげに口にして、その偽善性が暴露される。このように、この二編の短編は対照をなし、相互に照射し合っており、この二編の配置は効果的である。

偽造された過去によって新たなアイデンティティを与えられたクララは人種の境界を容易に越えてしまい、人種の境界がいかに恣意的なものであるかを作者は訴えている。しかし、次の“The Sheriff’s Children”では、肌色が黒人

の表象となっている者にとってその恣意的な境界を越えるのがいかに困難であるかが語られる。

南北戦争が終わってほぼ十年が過ぎた南部の超保守的な町で殺人事件が起こる。その老大佐殺人の容疑者として混血の若者が収監される。彼は老大佐の上着は盗んだが、殺人は犯してはいない。しかし、人種的偏見ゆえ犯人と決め付けた住人によるリンチが勃発するのは時間の問題であった。保安官は町の人びとから高潔な人物として尊敬されており、自ら盾となり暴徒たちを説得しどうにか退散させる。が、暴徒たちが押し込んで来た場合を想定して若者の足枷と手錠をはずしておいた。その若者が保安官にリボルバー銃を向け、お前こそが自分の父であり、借財を処理するために黒人の母と自分とを奴隷として売り飛ばし、母は鞭打たれ死んだと非難する。それでも、お前を撃ち殺したくない、俺は今まで一度も殺人は犯してはいないが、真犯人が見つからない限りいずれリンチに遭うのは必至。もし、俺を逃してくれればお前を撃たない、と言って逃亡を図ろうとする。その危機一髪の時、父の帰りが遅いのを気遣ってやって来た保安官の娘がその若者の腕を撃ち、父を救出する。傷の応急手当をして、明日、医者に診せるが、その時には、暴徒に撃たれたと言えと告げて父娘はその場を立ち去る。若気の至りから犯した罪に対する自責の念に駆られた保安官は、真犯人を探し出して息子を救出しようとの思いに至る。しかし、翌朝、保安官が目にしたのは、父による救済も白人によるリンチも拒否して自ら包帯を解き、出血死している息子の姿であった。

銃を手に入れた父を非難する若者の話し言葉は、保安官の予想とは裏腹に訛りの強い町の人々よりも雄弁で言葉遣いも優れている。それに気付いた保安官は、お前は学校に行ったことがあるだろうと言う。それに対する混血の若者の答えは厳しい現実を映している。「学校に行ったことはある。それによって事情がすばらしくよくなると夢見たものさ。でも、俺が学んだのは何だと思う？俺が学んだのは、どれほど勉強しようが、知識を持とうが、俺の肌の色は変えられない、この国じゃ退化の印に過ぎないものをこれから先もずっと身に纏っていかなくやならないってことだ。」(87) “Her Virginia Mammy”のクララは多少肌色が濃くとも白人として通用するが、この若者はその肌の色

ゆえ人種の壁を越えるという夢が無残に打ち破られたのである。多少の教育を受けようが、多少の教養を身に着けようが、肌の色は彼を黒人と特定し、彼を排除し、人種の境界を踏み越えるのを決して許さないのである。どこの誰かも分からぬ存在となるのを恐れ、出自にこだわり名字にこだわるクララとは対照的に、この短編の若者には名前すら与えられていない。彼は実の父を見つけながらも「どこの馬の骨とも分からぬ者」として葬り去られるのであろう。この悲劇的な短編の後に、子孫がより白くなればカラー・ラインを越えられると考えるクレイトン氏の物語“A Matter of Principle”が置かれることによってクレイトン氏の愚かさ滑稽さが浮き彫りにされるのである。

カラー・ラインを巡る攻防はこのように一進一退を繰り返しながらもその恣意性が徐々に明らかにされ、それに翻弄される人びとの苦悩が語られて行くのである。チェスナットは第5編“Cicely’s Dream”では、クレイトン氏が夢見る黒人から白人へのクロス・オーヴァーの逆パターン、つまり、白人の黒人へのクロス・オーヴァーを描いてみせる。南北戦争で受けた傷がもとで記憶喪失になった白人の北軍兵を「茶色」(132)の肌をしたシスリーは助け、彼を匿いジョンと名前を付けて看護するうちに愛し合うようになる。彼女はいつか見たすばらしく幸福になれるという夢が正夢になったと思うほど幸せであった。しかし、戦後、ボストンから白人女性教師ミス・チャンドラー (Miss. Chandler) が少し離れた町の黒人学校にやって来たことから状況は変わり始める。シスリーは解放された黒人が社会進出の機会を得るには教育が必要と感じ、チャンドラー先生のもとで学ぶ。そして、その学んだことを家に帰ってからジョンに教える。やがてチャンドラー先生が任期を終えボストンへ戻ることとなる。別れの挨拶で、彼女は、愛する人が、人はみな同胞と信じて戦場に赴き、自分の血によって自由という花に水を与えた地で、私はその自由という花を完全に咲かせるために赴いたと話す(166)。その日初めてシスリーに同行していたジョンはその別れの挨拶を聞いているうちに徐々に記憶を取り戻す。ジョンこそミス・チャンドラーが探し求めていた彼女の恋人ケリー大尉 (Captain Carey) であった。彼は「理性」を取り戻し、「彼の世界」(167)へ回帰する。

記憶を亡くしたジョンにシスリーは言葉を教えるが、彼女の言葉は発音も

抑揚もまぎれもなく黒人の英語である。記憶喪失の若者はその言葉を見事に覚え、ジョンという新たなアイデンティティを授けられる。彼は白人であってもその言葉遣いによって黒人として扱われることであろう。ここにも肌の色だけではなく、言葉という表象によって白人と黒人という境界線が引かれるという恣意性が表されている。

黒人を主流白人文化に同化させるという試みは教育によって実行される。この短編が設定されている時代は南北戦争直後である。この再建期までの橋渡しの時期にそれまで黒人教育を行っていなかった元奴隷州には教員不足から北部から教員が多数やってくる(150)。シスリーはミス・チャンドラーのもとで学ぶようになってからは、学んだことをジョンに教える。彼女にとって教育・学習は「機会の道を開く黄金の鍵」(155)であり、ジョンとそれを共有しようと考えたのである。シスリーは教育によって無知な黒人から脱して、さまざまな機会に恵まれるようになれると考えている。ミス・チャンドラーもその一人である。この短編では南部対北部が重要な対立図式になっている。北部人(ミス・チャンドラー)による南部黒人(シスリー)に対する教育が行われ、「機会の道を開く黄金の鍵」をまさに手に入れようとした時に、南部黒人は北部人によって愛するものを奪われ、再び敗北を味あわされるのである。あたかも、北部による不徹底な再建政策によって自由を与えられるはずであった南部黒人たちが、白人優勢の南部社会において見えざる人種の境界線によって自由を奪われ隷属状態に置かれるのを予見するかのようである。シスリーによるジョンへの教育は、南部黒人によって北部白人(ケリー大尉)を黒人にする試みとして始まるが、北部人から学んだ南部黒人はそれを似非南部黒人(ジョン)と共有することによって、皮肉にも北部白人としての彼のアイデンティティを回復させる機会を提供してしまうのである。シスリーもまた人種の境界を越えられなかったのである。シスリーの夢は夢のまた夢であった。

(二)

ここまでの5編は白人と黒人との混血の人びとがさまざまな形をとりながら人種の壁を越えようとする様を描いている。それに対して、続く“The

Passing of Grandison”は南北戦争以前の黒人奴隷の逃亡を巡る白人主人との知恵比べの話で、チェスナットが直接カラー・ラインを扱ったものではないが、「副次的にそれを目指した」(*To be*, 127)と述べている作品であろう。

南部プランテーションの若主人ディック (Dick Owens) は、ハンサムでインテリだが生来の怠け者。時は1850年代初頭。反奴隷制の声が高まり、北部への奴隷の逃亡が相次ぐ中、オハイオ州の若者が奴隷を逃亡させ、それによって所有財産である奴隷を盗んだ罪で有罪判決を受ける。この裁判をディックは傍聴し、この若者の英雄的な行為に感心する。彼には1年来求婚し続けている女性がいるが、彼女は怠け者のディックが何かをやり遂げるまで返事はしないとつれない。裁判に影響を受けた彼は、例えば奴隷をカナダに逃亡させれば求婚を受けてくれるかと問う。彼女は取り合わないが、ディックは本気である。父に気分転換のため旅に出たいと申し出て、奴隷のトムを同行したいと言う。父は、トムはこっそり新聞を読むほどに頭がよいから逃亡を企てるかもしれない、それにひきかえグランディソンはここでの生活に満足しているので、同行しても大丈夫だと言う。彼らはグランディソンを呼びつけ、逃亡して自由になった奴隷と食事も酒も煙草も十分与えられているお前の境遇ではどちらがよいかと尋ねる。グランディソンは自分のほうがずっと良い暮らしをしていると答える。そこでディックはグランディソンを同行することになる。ディックは北部の自由な空気に触れて彼が逃亡する気になってくれることを密かに願っている。ニューヨークでは自由に社会活動をしている黒人と話をしてみてはどうかとか、ボストンでは反奴隷主義者の手を借りたり、あるいはディックが金を置いて姿をくらましたりしてグランディソンに逃亡の機会をわざと与えるが、彼は逃げる気配さえ見せない。グランディソンは合衆国にいる限り奴隷だから、カナダへ連れて行かねばならないとディックは考えてナイアガラ見物と称して彼をカナダへ連れて行き、置き去りにする。家に戻ったディックはともかくも一つのことをやり遂げたので、チャーティーとの結婚にこぎつける。ところが、4週間後にグランディソンはぼろ同然となって農園に戻ってくる。それを見て、父は「反奴隷主義者や逃亡奴隷の嘘は彼を動かさしはしなかった」(198)と喜び、忠実な奴隷を歓迎する。この話は奴隷が主人に示した美德として広がるが、3週間後にグラン

ディソンは彼の一家もとも姿をくرامす。彼は家族を連れて逃亡する手はずを整え、家族ともども逃亡したのであった。ディックの父は逃亡奴隷を追跡してカナダとの国境エイリー湖のほとりまでやってくる。彼が目にするのは船に乗って彼のほうを見ている見慣れた黒人たちの顔であった。

黒人奴隷は衣食住にことかかないようにしておけば、境遇を受け入れるという白人農園主の思い込みを逆手にとってグランディソンは白人が黒人に期待する愚鈍な黒人を演じ切って見事白人を出し抜き、自分だけではなく家族も奴隷という境遇から救出するのである。白人の高慢な思い込みとは裏腹に奴隷の身分に満足する黒人などいないというメッセージがこの喜劇調の短編からは伝わってくる。グランディソン一家は合衆国にいる限りは人種の境界を越えることはできないが、カナダとの国境を越えることによって新たな生活を手に入れることができるのである。この短編はカラー・ラインを直接扱った物語ではないが、その表題に示されている“passing”は白人のような肌色で生まれた混血黒人が白人になりすますパッシングを表すのではなく、アメリカ南部では所有財産に過ぎない黒人奴隷たちが国境を越えることによって新たな人間としての生を手に入れることを象徴しているのであろうし、それゆえ作者の言うように副次的にカラー・ラインを越える物語となっている。先のシスリーは北部人を南部人にパッシングさせる夢も白人を黒人にクロス・オーヴァーさせる夢も叶わなかったが、グランディソン一家は地理的空間をパッシングすることによって人種的境界もクロス・オーヴァーする夢を叶える。この中編に近い長さをもつ短編を読む限りにおいてはそのように解釈できる。しかし、この作品を次の短編との配置において捉え直して見ると先ほどの解釈には修正が求められることが分かるであろう。

第7番目に位置するのは“Uncle Wellington’s Wives”で、この短編の主人公アンクル・ウェリントン黒人の母の肌の色合いは受け継いでいるものの白人の父親似である(207)。時代設定は1870年代。彼は、北部から来た立派な身なりの混血の教授による北部における社会的平等についての講演を聴いて感銘を受け、自由と平等の北部に行つて白人女性と結婚したいと思ひ詰める。実は、彼には南北戦争以前に結婚したミリー(Milly)という良妻がいる。にもかかわらず、彼は彼女と離婚してでも北部に旅立ちたいのだ。事情を隠

して弁護士に相談すると、戦前に奴隷の身分で結婚したのなら、戦後結婚の継続の意志を確認して法的手続きを取らない限り、戦前の結婚は無効との判断。それを聞いて彼は奴隷解放令以来の晴れ晴れとした開放感を味わい、ミリーに薪を取りに行くと言ったまま家を出る。オハイオ州のグローブランドで路面電車に乗ると、白人女性の間に座らされ、この上ない光栄に浴したと感じ、ここそ約束の地に違いないと思う(234)。数週間経って、裕福なトッド氏の御者として雇われ、そこの料理女が彼に好意を寄せるようになる。彼女はアイルランド系の女性となっているが、実は黒人の血を引いている。二人は結婚し、アイルランド系の多い地区に移り住むが、間もなく妻は解雇される。さらに不幸は続き、大家はアンクル・ウェリントンが混血と知って、黒人とは一緒に住めないとかれらを追い出す。二人は黒人に好意的な地区に移り住むが妻は白人であるという意識が拭いきれず周囲とうまく行かなくなり、混血の男との結婚を厭い酒に溺れるようになる。追い討ちをかけるように不幸が重なる。アンクル・ウェリントンはトッド氏一家をオペラに送る途中馬車をひっくり返し、解雇されてしまう。仕方なく漆喰塗りの職に就くが、冬になると仕事がなくなり、妻は洗濯女になる。アンクル・ウェリントンは間もなく妻に代わってその仕事を引き受けざるを得なくなる。北部でのバラ色の結婚生活は色褪せ、彼は南部で味わったよりも厳しい不平等を感じるようになる。北部ではたたくさんの特権への道が開かれていようと、彼はそれに見合うだけの教育を受けておらず、「理論上は有色人種も白人も同じだが、金や才能あるいは地位がなければ、どちらも格別大したことはない」(250-51)ということ思い知らされる。ある日妻がいつになく上機嫌で彼に一日釣りに出かけるように勧める。帰宅してみると彼の衣類だけを残して家はおもむけの殻、死んだと思っていた亭主が生きており一緒に暮らすことになったとの書置きが残されているだけ。彼は後悔と寂しさから元の妻ミリーに会いたくなり、ノース・キャロライナに戻ることにする。家にたどり着き、中の様子を伺うと、今しも牧師がミリーにアンクル・ウェリントンのことは諦めて自分と結婚して欲しいと求婚中。ミリーはそれに対し、不実な夫だが、あの人は今戻って来たら迎え入れるかもしれないと応える。アンクル・ウェリントンは15ヶ月前、薪を取りに行くと言ったまま家出をしたのだが、それに

あわせるように、薪を取って来たよと言いながら家に入っていく。

アンクル・ウェリントン「彼の自由を手に入れるのにあまりにも多くの代価を払った」(261)にもかかわらず、北部においても本当の自由は手に入らなかったのである。彼は南部から北部へと地理的境界を通過したが、人種の壁は厚く差別の厳しさに変わりはなかったのである。この短編の前に置かれた“The Passing of Grandison”はカナダへの国境を通過したところで物語は終わっているが、次に置かれたこの短編によってその後のグランディソン一家が直面するであろう現実の厳しさが照射される。読者は、“Uncle Wellington’s Wives”を読んだあとでは、グランディソン一家は地理的にはパッシングできたものの果たして人種的境界もクロス・オーバーできるのであればかと自問を余儀なくされる。この二作品は、ともにほら話風の大きさをもちた短編ではあるが、南北戦争以前には奴隷の身から解放され自由を手に入れることが第一義であった有色人種が、奴隷解放後もなお偏見や差別に直面せざるを得ない現実がその連続する流れの中で映し出されるのである。

喜劇調のこれら二短編とは対照的に、最後の二編は悲劇である。

“The Bouquet”は白人の女性教師マイロヴァー先生(Miss Myrover)と彼女が教える黒人学校の生徒ソフィー(Sophy)の悲しい交流の物語である。マイロヴァー先生は南部の旧家のお嬢様育ちだが、南北戦争によって父を亡くし、南部に投資していた債券も屑となり、食べていくため唯一空席であった黒人学校の先生の職を得る。黒人に挨拶をするという習慣がない彼女は、道では生徒たちに挨拶はしない。黒人の生徒たちに教えることは大変であったが、彼女を女神のごとく慕い、白人の美しい女性を崇拜するかのよう屈託なく明るい微笑を投げかけてくれるソフィーにだけは心打ち解けることができた。しかし、先生は3年後に亡くなる。彼女の母は、娘が黒人学校での過労がたたって死んだと思い込み、葬儀への黒人の参列を拒否する。ソフィーは白人専用の墓地で行われる葬儀を遠目で見ているほかなかった。ソフィーの手には先生が好きだった黄色のバラの花束が握られている。しかし、ソフィーは白人専用の墓地に足を踏み入れることはできない。埋葬も終わり人影もなくなった時、彼女は先生の飼っていた犬に気付く。彼女は花束をその犬

に託して墓に捧げるのであった。

有色人種に対する頑迷なまでの差別意識は先生の母親が体現している。彼女は娘が黒人学校の先生になると聞いて、「そんな人たち[黒人]を所有することと教育することとはとんでもなく違うのよ。あの人たちに教育が必要なの？それはあの人たちを働くのに不向きにするだけよ。」と反対する(272)。先の短編“Uncle Wellington’s Wives”で主人公が職に就きたくても教育を受けていないのが障害となるのを知っている読者には、この言葉は皮肉に響く。さらに、その母をなだめる娘の言葉、「あの人たちは今は自由よ、お母様、それに教育を受ければいい仕事につけるかもしれないわ。」(272 - 73)は、南部では墓地でさえも白人と有色人種では区別されている状況においては虚ろに響く。死んでも人種の境界を越えることはできず、カラー・ラインは歴然と存続するのである。

最後の“The Web of Circumstance”では、無実の罪を着せられた混血のベン・デイヴィス (Ben Davis) 一家の悲惨な運命が描かれる。時代は1880年代初頭。鍛冶屋のベンは商売も繁盛し、しっかりと蓄えもしていた。ある日、ソートン大佐 (Colonel Thornton) が馬に蹄鉄付けを依頼、大佐が立ち去り、大佐の召使も所用があって出来上がりまで待てないと言うので、ベンが大佐の馬小屋に馬を戻すこととなる。ところが、翌日、大佐がニューヨーク土産にもらった立派な乗馬用の鞭が行方不明になっていた。その鞭は驚いたことにベンの店の車輪の山の中から発見される。ベンは大佐の鞭を盗んだ容疑で逮捕され、裁判にかけられる。弁護側から出された黒人の証人たちはベンが徳の高い人物だと述べ、白人の証人も彼の正直さを証言する。しかし、一連の状況証拠も原告側の白人証人の発言も彼にとっては不利なものばかり。曰く、ベンは大佐の鞭と同じものを欲しがっていた、彼は黒人に権利があるのなら少なくとも財産の半分は黒人のものだとか、黒人は教会に寄付し過ぎると言っていたなどなど。結果、評決は有罪、5年の懲役刑が言い渡される。その判決を聞いて、20年奴隷で過ごし、自由の身になって15年のベンは絶望を一瞬垣間見せるが、無表情になる。己の感情を素直に出さないのは、悲しいかな彼が20年間の奴隷としての生活で身に着けてしまった克己 (stoicism) によるものである。

チェスナットは法廷速記人をしていた経験から裁判に潜む人種差別を目の当たりにしていたであろう。ベンに対する裁判場面も15ページにもわたって描かれている。ベンと平行して行われた、白人の若者が女を巡る争いから犯した殺人に対しはたった1年の懲役刑、それに対して乗馬用鞭の窃盗容疑の有色人種には5年の懲役刑、しかも、裁判官は最高の20年の刑を与えてもよいところだが、家族持ちでもあり、町での評判のよさも考慮して5年に刑を留め置くと告げる。このように人種によって法的正義も簡単に曲げられてしまう理不尽さが浮き彫りにされる。

ベンが5年の謂れなき刑を終えて家に戻ると、別の家族が住んでおり、隣家を訪ねると、変わり果てたベンに気付かず、旦那は殺人罪で刑務所送りになり、奥さんは元雇い人と暮らしており、娘は酔っ払って小川に落ちて溺れ死に、息子は先週白人を撃って捕まり、その夜のうちにリンチに遭って殺された、財産は白人の手にわたりすべてなくなったと告げる。彼は家族の不幸と5年の刑期で味わった苦しみのはずべてはソートン大佐が仕組んだ畏によるものだと思い込み、大佐への復讐の気持ちが沸き起こるのを抑えられない。大佐の屋敷近くで待ち伏せし、うたた寝してしまったベンが目覚めると、天使のように愛らしい女の子が彼の顔や胸に草や花をきれいに並べている。夢の続きを見ているような彼の目には、その子の金髪は「純潔と無垢と平安の光輪」(321)のように光り輝いて見える。この子を殺めればその父であろう大佐に復讐ができるとの思いがよぎるが、その幼子の純真さにうたれた彼は、人間性を取り戻し殺人を思い止まる。その時、大佐らしき男が乗った馬でやって来るのが目に入る。今こそチャンスと思うがどうしたわけか身がすくみ、逆に逃げる体制になってしまう。蹄の音に気がついて振り向いた女の子は、手に棍棒を握り締めたままベンが走り寄って来るのを不思議そうな目で見ています。それを目撃した大佐は、薄汚い黒人に我が子が殺されると勘違いして銃を放つ。銃弾を浴びながらもベンはおも数歩進んで、女の子の足元で息絶える。

奴隷解放後、ベンは15年間勤勉に働き、金も貯めて土地も手に入れた。彼なりのささやかな成功の夢を実現したという自負があったのであろう。大佐の所有しているような鞭や馬車を欲しがるとベンに向けられた苦言に対して

も、それが買える経済力をもっておれば所有できない道理はないとベンは反論する（292-93）。彼は経済的には人種の壁を越えていたのかも知れない。しかし、それによって白人からの妬みや嫉みを招いていたのを彼は知らなかったのである。南北戦争、南部再建期を経てもなお、目に見えない人種の境界ははっきりと引かれており、それを越えようとするものには過酷な制裁が待ち受けていたのである。チェスナットは、白人と同等の権利を要求しつつも、白人社会に有色人種が親しく入り込む困難さを承知して次のように述べている。

The Negro does not ask for social equality with white people; that is to say, he does not ask for admission into private white society. The fear of intimate personal contact with the Negro on terms of equality seems the greatest bugbear to the Southern people in the discussion of the Negro question. . . .
(*Essays & Speeches*, 59)

この考えは、有色人種は白人に従属し第二市民として生きる道を推進しようとしていたブッカー・T・ワシントン（Booker T. Washington）の考えとは異なる。チェスナットは、南部白人側にある人種混交への恐怖、かつての被支配者によって支配される可能性への恐怖といった有色人種に対する謂れなき恐れを有色人種側が認識していることをここで示しているのである。しかし、彼は、白人も有色人種もそれぞれがそれぞれの領域に留まるようにと薦めているわけでは決してない。それは、「人種的対立によって南部の二つの人種が永久に融合しないという説を黒人は信じない」（*Essays & Speeches*, 61）という考えからも明らかである。彼は、「有色人種は別個の人種として隔離しておくべし」という白人至上主義の南部的論理（“the Southern theory”）（*ibid.*, 103）にははっきりと異議を唱えるのである。彼は、人種融合の困難さを十分認識したうえで、歴然と存在する見えざる人種の境界を排除し、白人と対等の社会的平等、社会的正義の確立に努めようとしているのである²。

黒人の妻を受け入れるブルー・ヴェインズもので始められたこの第二短編集は、その最後の二編として死後まで続く差別を描く“The Bouquet”と蜘蛛

の巣のように張り巡らされた人種的偏見に絡め取られ家族崩壊に至る“The Web of Circumstance”を配置することによって、この短編集が越えがたいカラー・ラインを描いているとの印象をいっそう強く与えるのに成功している。当時の読者状況を勘案すれば、ほとんどの読者が白人という時代であったからこそ³、カラー・ラインによって引き起こされる過酷な状況を知らしめたいという作者の意図は、この配置によって明確化されたと言えるであろう。

結 び

*The Wife of His Youth and Other Stories of The Color Line*は、“The Web of Circumstance”のペンの死を弔う祈りの言葉によって、閉じられている。

Some time, we are told, when the cycle of years has rolled around, there is to be another golden age, when all men will dwell together in love and harmony, and when peace and righteousness shall prevail for a thousand years. God speed the day, and let not the shining thread of hope become so enmeshed in the web of circumstance that we lose sight of it; but give us here and there, and now and then, some little foretaste of this golden age, that we may the more patiently and hopefully await its coming! (322-23)

「人が皆、愛と調和の中で暮らし、平和と正義が千年の間優勢となる黄金の日々」がいつの日か訪れるであろうが、今は、未来への希望の糸ですら複雑な蜘蛛の巣のような状況に絡め取られ、それを見失っているのが現状である。それゆえ、神に対して、希望の糸を見失わないようにさせてください、ほんの少しでも前もって黄金の時代を垣間見させてください、その時代を早く来させてくださいと祈りを捧げざるを得ないのである。この根底にあるのは、彼が“An Inside View of the Negro Question,” (1889)において述べている未来観である。

... his [the Negro's] hopes, his fears, his affections, his zeal—all the powers

of his being, are centered upon the question of his own future. He has no glorious past on which to rest his claim for consideration or to sustain him under the burden of present wrong; to the future he looks for all that life may offer him. (*Essays & Speeches*, 58)

栄光の過去ももたず、不正な現在の重荷に苛まされているからこそ、未来へと黒人のもてるすべての力は向けられるのである。この短編集に収められた物語は過去と現在の物語がすべてであって、未来に対する展望が欠如していると見ることも可能であろう。しかし、先に引用した短編集の最後に置かれた言葉によって、作者は来るべき黄金の時代を暗示しているとも言える。しかし、その未来を獲得するためには、忍耐強く希望をもって現在の問題を解決しながら前進しなければならないのである。この短編集が編まれたのと同じころに書かれたエッセイで彼は人種問題が南部だけの問題に留まらず、合衆国そのものの将来に関わる問題だと指摘している。

No one can deny the situation in the Southern States is deplorable. That it must sooner or later be corrected is certain. That, like slavery, the future of the colored race is a problem for the whole nation, must soon be admitted. That the Southern white people alone cannot be trusted to solve it with justice to the colored man, may, in the light of the past and the present, be sagely assumed.

It is well, in dealing with an evil, to get, if possible, at the root of it. And the root of this evil, it must be apparent to the most casual observer, is the race prejudice, not unknown at the North, but which hovers over the South like a nightmare, warping all judgments, darkening counsel, and confusing all standards of right and wrong, of justice and equity. Consciously or unconsciously, all conduct is affected by this consideration. Southern legislatures devote a large part of their time, now as before the Civil War, to devising ways and means to keep the Negro down. (*ibid.*, 105-6)

人種問題の根底にあるのは人種的偏見であり、19世紀末には南北戦争以前と同じように、黒人たちを下位に置き留めようとする法的装置が次々に生み出されていたのである。黒人たちの来るべき未来のためにチェスナットは差別状態に置かれた黒人たちの過去と現在を、そして、将来への切実な希望を作品化したのである。

作者自身はこの短編集に収められたそれぞれの短編を、当初は文芸作品として書いたつもりであったが、編集してみるとカラー・ラインという共通のテーマによって貫かれた作品群であることがページの指摘によって明らかになった。このカラー・ラインを扱った短編集によって黒人作家として進むべき道をチェスナットは見出したのであろう。それは、ファイエンバーグが言うように、カラー・ラインを越えようとするこの短編集中の有色人種の人びとのアイデンティティを描くうちに作者自身の声が明らかにされていったからであろう。

... the color line demands the more forceful assertion of identity which lies in crossing over the boundaries which inhibit and confine. And the characters' efforts to cross over, to devise new roles for themselves as social actors, parallel the unveiling of Chesnut's own narrative voice. (Fienberg, 207)

チェスナットはこの短編集ののち、長編小説に手を染め、プロパガンダ小説との非難を浴びるほどに白人たちの差別やその差別を保障するさまざまな制度に対し異議を唱え、黒人作家として自己の主張を鮮明に打ち出して行く⁴。彼は晩年その頃を振り返り、時代の要求に先んじて小説を書く困難を次のように述べている。

My books were written, from one point of view, a generation too soon. There was no such demand then as there is now for books by and about colored people. And I was writing against the trend of public opinion on the race question at that particular time. At that time the Negro was inarticulate,

I think I was the first man in the United States who shared his blood, to write serious fiction about the Negro. (*Essays & Speeches*, 514)

元奴隷であった人びとによる回顧談であるスレーヴ・ナラティブ (slave narrative) は多く流布していた状況を考慮すると、ここでチェスナットが「本」と呼ぶものは、フィクションを指していると考えてよからう。有色人種による、有色人種についてのフィクションに対する需要がまだなかった時代に、彼は声なき人びとの代弁者として作品を発表したのであった。その声を獲得し始めるきっかけを作ったのが作者の手によって巧妙に編まれたこの短編集であったと言える。

注

1 チェスナットはアフリカ系アメリカ人である黒人種を表すのに主として“the Negro”を用い、そのバリエーションとして“the colored race”、“colored person”を用いている。それらの言葉が表す人種の範疇には当然、白人と黒人との混血も含まれている。作品中では、肌の色によって純粹の黒人が混血かを表現しており、はっきりと混血を表す場合は“people of mixed blood”や“the mulatto”が用いられている。州によって人種の規定は異なるが、ミズーリー州では法的には、先祖が黒人種だけの場合は“a Negro”と規定され、白人種の先祖ももつ者は“a mulatto”と規定された。“mulatto”は白人と黒人との混血第一世代 (すなわち、2分の1黒人)、“quadroon”は“mulatto”と白人との混血 (すなわち、4分の1黒人)、“octoroon”は“quadroon”と白人との混血 (すなわち、8分の1黒人)を表すが、先の例のように、“mulatto”が混血の割合に関わらず黒人と白人との混血を表す場合にも用いられる。カラー・ラインは白人と黒人の血の割合によってある者を黒人と規定するのか、白人として規定するのかの、まさに、人種の線引きという意味にも用いられた。例えば、チェスナットは、「一般的な原則として、黒人の血が4分の1以下の者は白人とされた、理論上は。しかし、人種問題は実際にはさまざまに規定されていた。」と述べ、「カラー・ラインは黒人の血が4分の1で引かれる、よって[黒人の血が]たった4分の1の者は白人である。」(“What is a White Man?,” *Essays & Speeches*, 69)としている。しかし、5代前まで遡って先祖に黒人がいれば、黒人として扱われる州や、サウス・キャロライナのように、1831年の法律では、4分の1以上の黒人の血を引く者が黒人と規定されていたが、1879年には8分の1

以上の黒人の血を引く者は黒人とする、と規定が変更され、カラー・ラインが厳しくなった州もある (Wilson, 8)。

2 チェスナットが黒人の立場から要求する事柄を次の言葉が明確に示している。
 “The Negro knows what he wants. He wants an equal share in all public benefits, and an equal right to share in the exercise of every public function.” (“An Inside Views of the Negro Question,” *Essays & Speeches*, 59)

3 チェスナットは19世紀末から20世紀初頭の読者状況を振り返り、“... I had to sell my books chiefly to white readers. There were few colored book buyers.”と最晩年(1928)に述べている。 (“Accepting the Spingarn Medal,” *Essays & Speeches*, 514)

4 チェスナットの長編小説に関しては、以下の拙論を参照のこと。

「世紀転換期における南部とC. W. チェスナット *The Marrow of Tradition*を中心として」『言語文化』第2巻第2号(同志社大学言語文化学会) 1999, 197-214。

「『大佐の夢』における予測と裏切り 偽装された南部懐古小説」『言語文化』第4巻3号(同志社大学言語文化学会) 2002, 543-565。

引用文献

- Chesnutt, Charles W.. *The Wife of His Youth and Other Stories of The Color Line, Early Modern African American Writers*, Vol.II. Tokyo: Hon-No-Tomoshu, 1997.
- Fienberg, Lorne. “Charles W. Chesnutt’s *The Wife of His Youth*: The Unveiling of the Black Storyteller,” *Critical Essays on Charles W. Chesnutt*. New York: G. K. Hall, 1999.
- McElrath, Joseph R. & Robert C. Leitz, III eds. “*To Be an Author*” : *Letters of Charles W. Chesnutt, 1889-1905*. Princeton: Princeton University Press, 1997.
- ____ & Jesse S. Crisler eds. *Charles W. Chesnutt: Essays & Speeches*. Stanford: Stanford University Press, 1999.
- Wilson, Matthew. *Whiteness in the Novels of Charles W. Chesnutt*. Jackson: University Press of Mississippi, 2004.

A Study of Charles W. Chesnutt's *The Wife of His Youth*: His Challenge to the Color Line

Hisao NAKAMURA

Key words: Charles W. Chesnutt, the color line, *The Wife of His Youth*

The success of Charles W. Chesnutt's first collected stories, *The Conjure Woman*, led to the planning of the second collection, *The Wife of His Youth* (1899). *The Conjure Woman* was favorably accepted by readers at that time, most of whom were white people, since its stories are seemingly tall-tales or fables. In editing the second book, it was suggested by Walter Hines Page, the editor of the *Atlantic Monthly*, that "And Other Stories of the Color Line" be added to the title. This suggestion awoke Chesnutt to the fact that the nine stories selected for the volume depict "lives that no one has ever before attempted to adequately describe," that is, the lives of colored people suffering from the color line. At this point, he decided to arrange the stories "most effectively," as he wrote to the publisher, Houghton, Mifflin & Co. The order of the stories was designed as follows: 1. "The Wife of His Youth," 2. "Her Virginia Mammy," 3. "The Sheriff's Children," 4. "A Matter of Principle," 5. "Cicely's Dream," 6. "The Passing of Grandison," 7. "Uncle Wellington's Wives," 8. "The Bouquet," and 9. "The Web of Circumstance."

This paper attempts to explore how Chesnutt arranged the nine stories and the significance of the arrangement he thought the most effective. My analysis shows mainly two points. The first point is that each story is so elaborately arranged as to be intertextually related to the story following it. For example, "The Wife of His Youth" is the story of the acceptance of the

past, while the next one, “Her Virginia Mammy” is concerned with that of the rejection of the past. Then, “Her Virginia Mammy” makes sharp contrast with “The Sheriff’s Children.” The former tells about “Miss Nobody, from Nowhere” who succeeds in passing. She does not know her own parents, though her mother is in fact a colored woman. The latter is about a colored boy who died in a jail as “Nobody, from Nowhere,” though he knows who his father is and his white father, the sheriff at the jail, recognizes him. The second point is that the book opens with happy ending stories of the Blue Veins, rich colored people of the middle class, and closes with two tragic stories of poor colored people who attempt to cross over the color line. The order of the stories is designed to reflect Chesnutt’s inner voices: first, it is extremely difficult to cross over the color line, an invisible and artificial line to reject colored people or to shut out them from the White Supremacy South; secondly, this book, disguised as a collection of short stories, is his first challenge to the color line. He appeals to the white readers against the injustice and arbitrariness of the color line in the South.